

特別公開企画

立命館大学グローバル COE プログラム 「生存学」創成拠点

PTSD と「記憶」の歴史

アラン・ヤング教授を迎えて

日時 2007年7月21日(土) 13:00 ~ 18:00

会場 立命館大学衣笠キャンパス 以学館 2号ホール

(佐藤) それでは定刻を過ぎておりますので、本日の企画「PTSD と『記憶』の歴史」を始めさせていただきます。私は、本日司会を務めさせていただきます、立命館大学文学部の佐藤と申します。よろしくお願いいたします。

To all of you present here, I am pleasure to express sincere thanks for your attendance at this meeting in spite of your busy schedule. On behalf of the sponsors of this meeting, Professor Nishi would like to give a brief address.

開始に先立ちまして、立命館大学先端総合学術研究科の西研究科長より一言ごあいさつ申し上げます。

開会の辞

西 成彦 (立命館大学大学院 先端総合学術研究科長)

皆さん、こんにちは。梅雨空の中をご参集いただき、どうもありがとうございます。私は立命館大学先端総合学術研究科の研究科長で、西と申します。私たちの研究科は、「公共」「生命」「共生」「表象」という四つのテーマ領域を柱に据えて、1学年30名という院生を育てる一貫性博士課程として、4年少し前の2003年4月に開設され、今日の日を迎えるに至っております。私たち研究科の教員の大半が事業推進者として参加することになり、グロー

バル COE「生存学」創成拠点をこれから立命館の人間科学研究所と共に担うことになった研究科を代表する一人として、最初にごあいさつさせていただきます。

「PTSD と『記憶』の歴史」という本日のテーマですが、PTSD という言葉は決して古い言葉ではなく、この言葉が発明されて多くの人々の間で使われるようになってからというもの、われわれが生きる生活空間は大きく変貌したように思います。心身の変調が何らかの大きな出来事を経験と分かち難く結びついているという考え方は、特に二度の世界大戦を経験した 20 世紀がもたらした、重要で大きな産物の一つです。私たちはさまざまな出来事に対して、ほとんど無防備な状態、ほとんどむき出しの身体と共にさらされていて、一度生き永らえた出来事は繰り返し、繰り返し回帰してくるという生を宿命づけられているわけです。こうした出来事の回帰という認識をくぐらない限りは、公共空間なるものを立ち上げることは難しいでしょうし、多様な存在が共生し得るようなビジョンを描くことも難しいでしょう。また、出来事の表象が、そうした繰り返しの技法として重視されてきたことは言うまでもありませんし、PTSD とはまさに死と背中合わせにある生命の一形式であるといっても過言ではない、だれにとっても他人事ではないと思います。こういった PTSD という言葉の発明によってもたらされた諸学問の変容に、ここに集まった私たちはただならない関心を抱いているといえるはずです。

今日、カナダ・マギル大学からアラン・ヤング先生を招いて講演会およびワークショップを企画することになりましたが、この企画に当たっては慶應義塾大学のグローバル COE「論理と感性の先端的教育研究拠点形成」の力を全面的に仰ぐことになりました。同大学文学部の宮坂敬造先生には、通訳までお願いすることとなり、誠に感謝の意に堪えません。本企画は、本年度グローバル COE に採択された、先ほど申し上げた、「生存学」創成拠点が主催する最初の大きなイベントですが、開会に当たって、宮坂先生をはじめとする慶應義塾大学に対する感謝の気持ちを前もってお伝えしておきたいと思います。

これから皆さんと共に 5 時間の長丁場となりますが、本日の会が実り多い

会になりますよう、温かいご支援と積極的なご協力をいただければと思います。

それでは、日本にお越しになってもう1週間ぐらいになると昨日伺いました。東京で台風も地震も経験されたということで、まさに典型的な日本を既に経験されているアラン・ヤング先生について、まず宮坂慶應義塾大学教授から詳しいご紹介をいただきたいと思います。

Allan Young 教授の紹介

宮坂 敬造（慶應義塾大学 文学部 教授）

慶應義塾大学の宮坂敬造でございます。ここにいらっしゃるアラン・ヤング先生の基調講演がもうじき始まりますが、簡単に先生のご紹介をさせていただきます。

世界的に著名な業績で知られる医療人類学者アラン・ヤング先生が初めて来日されました。本日もふくめ、日本での幾つかの講演の機会を持っているわけです。同先生は、人類学や文化精神医学で独特の深い研究伝統を持つカナダ・マギル大学において、1989年以來医療人類学の研究・教育を精力的に行ってこられました。同大学医学部医療社会研究学科主任教授、同文学部人類学科併任教授として文化精神医学や医療社会学、医学史研究等の関連分野と連携しつつ、中心的な指導者の役割を果たしてこられました。先生の著名な PTSD の医療人類学研究に加え、実に広い範囲にわたって、研究を進めておられるのですが、それらの研究の根底には、文化社会が依拠する認識枠組みの比較と、その歴史的变化の研究という文化人類学的な構想が一貫して見られます。その点で、人間諸科学の基軸に触れる文化人類学者としてのヤング先生の姿が印象的な形で浮かび上がってくると思われま

す。アラン・ヤング先生は、現在、慶應義塾大学社会学研究科招聘教授として来日されておりますが、私どもの大学院教育プログラムの強化のために、大学院で講義をお願いする傍ら、来週の日曜日に企画しているグローバル COE シンポジウム「文化医療臨床人類学の新展開」を中心的に行っていた

たく準備を進めておりました。その過程で、立命館大学グローバル COE プログラム「生存学」創成拠点との共同開催として「PTSD と「記憶」の歴史

アラン・ヤング教授を迎えて」を企画する経緯が生まれました。生存学という全く新しい視座に立ち、理論と実践志向との融合を具体的研究教育の作業の中で行っていく立命館大学拠点は、今後とも強い関心をひきつけて注目されていくと思われるのですが、その第 1 回目のシンポジウムがアラン・ヤング先生の PTSD のご研究に引き寄せて行われる経緯となりまして、同先生招聘責任者として私も微力ながら関与する機会をいただきました。たくさん学ばせていただく今回の機会を、アラン・ヤング先生ともども、立命館大学の先生方・関係者の方々に対して深く感謝しております。

アラン・ヤング先生は、わが国では『PTSD の医療人類学』というみずす書房の翻訳で知られております。同書によりアラン・ヤング先生は 1998 年にウェルカム医療人類学メダルを受賞されているわけですが、ご研究の範囲は、PTSD だけでなく広い範囲にまたがっています。

1950 ~ 60 年ぐらいのアメリカは心理学的人類学がまだ強かったのですが、そういう時期に先生はまず人類学徒としてペンシルヴァニア大学院で勉学を始めたわけですが、その期間中の 1959 年、合衆国にまだ徴兵制があった時期で、徴兵されることになりました。先生ご自身は戦争に反対の立場だったとおっしゃっています。ただし、実際の軍務参加は大学院勉学とフィールド調査中は猶予され、その期間中は人類学者エヴァンズ・プリッチャードの妖術研究に導かれ、いろいろ研究を企画した結果、最終的にはエチオピアで調査をして、アラハム族の村で伝統的な医療体系や、ツァーカルトなどの問題を研究されております。帰国後の 67 年、徴兵時の軍務訓練後に、人類学が役に立つかもしれないと考えた幹部将校があり、その結果、ベトナムの激戦地に行くことなく、ペンタゴン勤務となったわけです。その経緯から、戦争捕虜の問題の調査に従事しまして、そういう経過が以後の研究となる、いわゆる PTSD を持つ傷病兵という問題につながっていったわけです。ネパールで、医療人類学的調査（1979 年、81 年）にかかわり、さらにベトナム帰還兵の PTSD 治療やその精神学的研究について一連の調査を行いました。

近年は、進化精神医学の新しい潮流全般に関連する先端的諸研究の暗黙の前提を、医療人類学の立場から批判的に検討されております。

以上、簡単に言いましたが、ヤング先生の近年の研究展開を見てみますと、非常に奥行きが深い光景が見えてきます。初期のエヴァンズ・プリッチャードの研究に導かれた妖術・呪術の文化人類学的研究、非西欧社会の医療人類学、その後、その展望を大きく拡大した PTSD の医療人類学だけでなく、近年は先端医療技術、バイオポリティクスの諸問題をカバーし、進化精神医学・進化心理学・進化認知考古学的な先端的な研究を総合的に研究するなど、極めて広範な研究展開が見えてきます。先生による範囲の広い業績を理解するためには、それらの背後にある医療人類学の深層の知というものを理解する必要があると思われます。「文化人類学と医療人類学は、現在二つに分かれ、その距離が日々増しているのが現状だが、本来二つの分野は社会的認識の研究という点で全く同一のものである」と述べるヤング先生の研究精神を、私たちも追体験するような試みが必要だと思われます。

先生の数ある幾つかの領域の中で、本日の公演内容はこの PTSD の研究に連なるもので、今日は、「仮想的 PTSD」という問題を論じられます。9.11 テロ攻撃後にアメリカ合衆国において急速に出現してきた新しいタイプの PTSD に焦点を当てています。それがどのような経緯をたどって社会的に構成されてきたかを論じる、本日の講演内容は、先生による PTSD 研究の最新の展開を示すものと思われます。以上です（拍手）

（佐藤） 宮坂先生、ご紹介どうもありがとうございました。それでは、ちょっと前後しましたが、今日の進行について一言説明させていただきます。このプログラムをご覧ください。「PTSDと『記憶』の歴史」となっておりまして、本日アラン・ヤング先生の後に指定質問ということで、先端総合学術研究科院生、小宅さんと片山さんの二人に質問していただきます。片山さんは現職の医師で勤務があり、ただいま移動中と伺っております。皆様もお気づきと思いますが、このシンポジウムは基本的に日本語で行われます。ヤング先生以外は、登壇者はすべて日本語でしゃべっていただいて、隣にいる同時通訳

の方がヤング先生に英語で伝えるという形式になっておりますので、ご了承ください。それでは、アラン・ヤング先生に講演をお願いしたいと思います。